

HEKIYOUKAI

辟雍



「辟雍」第16号 東京学芸大学 辟雍会機関誌
Copyright © 2019 Hekiyoukai All Rights Reserved.

www.hekiyou.com

2019年 第16号

東京学芸大学辟雍会機関誌

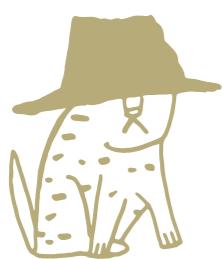
辟雍 第16号

目次

会長挨拶	2
沿革	3
支部便り	4
支部連絡先一覧	13
卒業生から	14
学芸大キャンパスの 移り変わり	24
辟雍会奨学金 学生の近県学校訪問	34
2019年度各部の活動	35
あとがき	36



本部棟前の桜(2019年)



本会は東京学芸大学の学部等の学生、
同窓生、教職員で構成されています

2019年会長挨拶

馬渕貞利

今年創立16年目を迎える辟雍会は、副会長の松川先生のご尽力によって、福井県にも支部ができることになり、また、宮城県でも結成に向けて準備が進められております。これで、ようやく全国47都道府県のうちの3分の2の道府県に支部が結成されることになります。この間、とりわけ最近は牛歩のごとき歩みではありましたが、支部長をはじめ多くの方々のご努力によって各支部での活動も継続されており、辟雍会は眞の意味での全国同窓会としての体様を整えつつあります。残る支部未結成の県につきましては、関係各位のご協力・ご尽力をいただきながら、早く支部結成に漕ぎつけたいと願っております。

なお、ここで付言しておきますと、東京には東京府立の師範学校同窓会を前身とし、1949年の大学創立時から「社団法人東京学芸大学同窓会」と改名された確固たる同窓会組織があり、活発に活動を続けておられることは皆様ご承知の通りであります。一方、東京都には教員以外の職場で頑張っておられる学芸大卒業生も多く、「オール学芸の会」を標榜する辟雍会は、そうした方々への対応も急ぐ必要があります。「東京学芸大学同窓会」と相談をしながら何とかその方向性を見出したいと考えております。

ところで、「令和」の時代になっても、天変地異が相次ぎ、今年も日本の各地で集中豪雨等の被害が出ています。こうした中で会員の皆様の安全と健康を祈願しつつ、日頃から会活動について考えていることをいくつか記しておきたいと思います。

今日のように労働環境が目まぐるしく変化する時代にあっては、一つの仕事に打ち込んで働き続けることは容易なことではありません。終身雇用制が崩壊し、若者の間では転職が当たり前のようになってきて



います。その上、教職は「ブラック業種」の一つとさえ言われ、マイナスイメージが拡散しています。確かに学校の先生たちの仕事はあまりにも多く、労働過重の状態を改善する方策はいち早く講じられるべきです。しかしまた、現代社会がもたらす諸課題が先生たちを苦しめています。情報化・国際化の進展に見合う教育内容の改善、いじめや登校拒否への対応、「スマホ漬け」の子どもへの対策等々、一そもそもこうした事態に対する対応を先生たちにだけ求めることが間違っています。今日のような教育環境においては、学校教育の在り方そのものが抜本的に改善される必要があるように思われます。その一方で、今こそ教職の重要性や遺り甲斐が論じられるべき時もあります。

昨年、東京都の小学校教員の採用試験倍率がついに2倍のラインを割り込み、1.8倍のレベルにまで落ち込んで、若者たちの「教職離れ」が危惧される事態になっています。こうした状況を踏まえて学芸大学では「教師の魅力発信プロジェクト」が推進されていますが、辟雍会は学芸大学のこの先導的試みを全力で支援していくたいと思っています。

いちごいちえ
「一期一会」…一生に一度の出会いと心得て互いに誠意を尽くして応接すべしという茶道の精神を表すこの語は、近年よく耳や目にします。ようやく夏らしくなった

れました。そのお通夜の席で何人かの方が涙ながらにお別れの言葉を述べられましたが、そこから偲ばれる先生のお人柄や学芸大学体育科の卒業生の皆さんのがりの深さに心を打されました。その時、ふと脳裏をよぎったのがこの言葉です。この言葉はかつて歴史研究室の先輩であった佐藤和彦先生の好きな言葉でもありました。今年初めて訪れた佐藤先生のお墓の墓碑には「ぼくによる」のついた「學」の字が篆書体で刻まれていました。「學」の古字だそうです。それは佐藤先生の学問への思いとともに学芸大学での先生との出会いを彷彿とさせるものでした。ちなみに佐藤ゼミの学生さんたちとの出会いも私にとっては大事な「一期一会」となっています。

高野(下東)由美さんは今でも書道展の案内を送ってくれますが、彼女は昨年文部科学大臣賞を受賞しました。後日伺ったところ、かつて彼女の字に私が文句をつけたことが書に打ち込む契機になったというから驚きました。また、竹内(岡本)千早さんは卒業後横浜の船の博物館の学芸員になった人ですが、彼女は私が膨った印鑑を今も大切に使ってくれているそうです。時間があると、私は学生たちの卒業時に小さな刻印を贈るのを習わしとしてきました。こうしたささやかな学生たちとの「一期一会」が私の宝物なのです。

私は、一人ひとりの学芸大生が学芸大学における先生や友人たちとの「一期一会」を大切にしてくれるることを願っています。

そして、辟雍会がそうした「一期一会」を再び拾い上げる場となることを夢見ています。

この原稿を書いている2019年の夏は、日韓関係がこじれにこじれています。政府やマスメディアが国民の憎悪心を煽って断絶の溝を深くすることは日韓両国国民の生活やその将来にとっては決して望ましいことではありません。

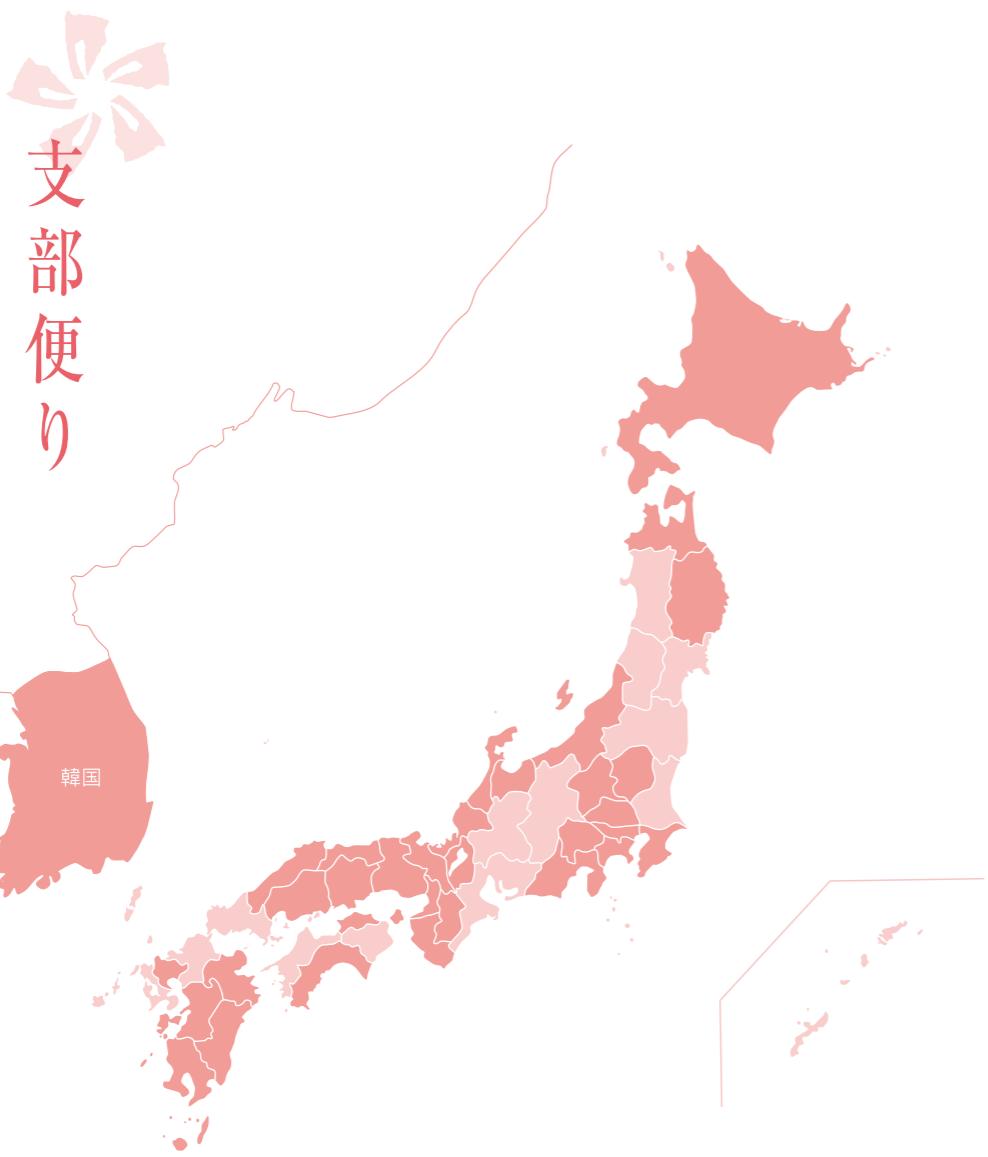
しかし、今日の世界では誇らしげにナショナリズムを吹聴する人が後を絶ちません。自国の権利や利益擁護を口実にして軍備拡張を正当化し、排外主義的な発言が公然と行われるような殺伐とした雰囲気の中で、歴史的に獲得してきた共通理念さえも色褪せて見えるほどです。他者の理解ではなく他者の排除を、協調や協力ではなく対抗・対立をこととする言動がはびこっています。こういう流れを断ち切るためにも、ナショナリズムの危険性や罪悪性がもっと声高に論じられる必要があると思います。

これまで歴史上、ナショナリズムは常に他者、とりわけ少数者の差別や抑圧につながったことを決して忘れてはなりません。私たちが日本や日本人について語るとき、それが日本のナショナリズムを煽るものになっていないかどうか、常に注意を払うべきだと思います。これに対して、東京学芸大学辟雍会において連携・協力する行動は、ナショナリズムのような架空の観念を弄ぶことは違って、きわめて具体的で積極性のあるものだと確信しています。辟雍会は東京学芸大学の学生・教職員や卒業生を含め東京学芸大学に関わりのある全ての人びとが連携・協力する組織です。そういう辟雍会の中で、各支部が韓国辟雍会との連携・協力関係を強めていくことも日韓の友好協力関係を深める一助になると思います。私は、一人でも多くの人びとが辟雍会を拠り所として協力・共助のネットワークの構築に参加してくださることを願ってやみません。

沿革

- 2003.11.03(平成15) 「辟雍会(東京学芸大学全国同窓会)」創立
荒尾禎秀会長就任
青森県支部設立
石川県支部設立
富山県支部設立
岩手県支部設立
千葉県支部設立
島根県支部設立
高知県支部設立
長谷川貞夫会長就任
北海道支部設立
東京学芸大学創立60周年記念シンポジウムを大学と共に催
鷲山恭彦会長就任
岡山県支部設立
鳥取県支部設立
静岡県支部設立
新潟県支部設立
広島県支部設立
神奈川県支部設立
鷲山恭彦会長再任(2期目)
山梨県支部設立
鹿児島県支部設立
群馬県支部設立
近畿支部設立
「東京学芸大学辟雍会」と改称
本会創立10周年記念祝賀会開催
佐賀県支部設立
鷲山恭彦会長再任(3期目)
栃木県支部設立
熊本県支部設立
大分県支部設立
埼玉県支部設立
宮崎県支部設立
馬渕貞利会長就任
韓国支部設立
馬渕貞利会長再任(2期目)
香川県支部設立
福井県支部設立

支部便り



各支部の設立状況

番号	名称	設立年月日
1	青森県支部	2003.12.07(平成15)
2	石川県支部	2005.07.02(平成17)
3	富山県支部「獅子の会」	2005.08.22(平成17)
4	岩手県支部	2005.10.01(平成17)
5	千葉県支部	2006.02.25(平成18)
6	島根県支部	2006.10.01(平成18)
7	高知県支部「高知辟雍会」	2007.06.24(平成19)
8	北海道支部	2009.08.01(平成21)
9	岡山県支部「岡山辟雍会」	2011.01.29(平成23)
10	鳥取県支部	2011.02.27(平成23)
11	静岡県支部「静岡辟雍会」	2011.03.26(平成23)
12	新潟県支部	2011.08.28(平成23)
13	広島県支部「広島辟雍会」	2011.10.30(平成23)
14	神奈川県支部	2011.11.26(平成23)

番号	名称	設立年月日
15	山梨県支部	2012.08.17(平成24)
16	鹿児島県支部	2012.10.07(平成24)
17	群馬県支部「群馬辟雍会」	2013.07.27(平成25)
18	近畿支部	2013.10.26(平成25)
19	佐賀県支部	2014.03.15(平成26)
20	栃木県支部	2014.06.15(平成26)
21	熊本県支部	2014.10.11(平成26)
22	大分県支部	2014.11.08(平成26)
23	埼玉県支部	2015.05.31(平成27)
24	宮崎県支部	2016.02.20(平成28)
25	韓国支部「韓国辟雍会」	2017.09.14(平成29)
26	香川県支部	2018.08.17(平成30)
27	福井県支部	2019.08.30(令和元)

北海道

令和初となる辟雍会北海道支部の「第11回総会及び懇親会」が、令和元年8月3日(土)に毎年恒例の会場であるネストホテル札幌駅前(札幌市中央区)において開催されました。北海道在住の東学大同窓生相互の親睦を図るとともに、本道の教育及び文化の振興・発展に寄与することを目的として平成21年8月に設立された当支部同窓会は、毎年楽しく有意義な集いを積み重ね、今年で11回目を数えております。年々同窓生の輪を広げ、現在は85名の会員で構成されています。今年は当支部役員改選が行われ、設立当初から会長を務めていた鶴丸泰生氏が顧問となり、新会長に佐々木敏氏、副会長に細川隆氏が就任し、令和元年に相応しい新体制にて始動しました。

総会は、会長挨拶の後、全国代表者会議報告、会計・監査報告、支部規約の確認、さらに次年度の開催日程(H31承され、続いて役員改選の承認がなされました。

続く懇親会では、全参加者(今年も昨年同様の9名)による近況報告や、母校の思い出話などでたいへん盛り上がりました。卒業して数十年経っても学籍番号を空で言える方多く、母校への愛と誇りを感じられるひとときとなりました。今年も

初参加の方がいらっしゃいましたが、毎年ご多分に漏れず、様々なところで「つながり」が見られ、その後行われた二次会に至るまで、あつという間の楽しい時間が過ぎていきました。今後も、東学大にご縁のある方の講演会や北海道愛・学大愛を胸に頑張るファイターズ・栗山監督の応援企画など、会の充実発展に努めて参りたいと考えています。末筆ながら、辟雍会の益々の発展と会員の皆さまのご健勝をご祈念申し上げ、今年度の北海道支部報告とさせていただきます。

北海道支部新会長 佐々木敏(1972年D類保体科卒)



青森県

令和元年7月28日(日)に総会と懇親会を開催しました。今回は以前から話題に上がっていた、「青森市、八戸市、弘前市の3市で会場を持ち回りにしてみたらどうだろう。」という意見が現実となり、初?(先輩方に未確認でした)の弘前市開催となりました。青森、八戸だとなかなか行けないけど弘前だと行ける! という声をいただき、やってみて良かったと思っております。今後も県内各地にいる会員が参加しやすい会を目指していきます。

青森県支部事務局長 里村 輝
(1998年N類生涯スポーツ科卒)



令和元年7月28日 弘前にて

栃木県

辟雍会栃木県支部は、「栃木県の教育・文化・スポーツを支援する東京学芸大学同窓生の楽しい懇親会」として、2014年6月15日に設立しました。支部総会・懇親会は、毎年、宇都宮市内で開催。参加者は、幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校、大学等の教育界で活躍する先生・事務職員はもちろん、市役所、教育委員会、市議会議員、刑務官、蕎麦屋さんなどまで、栃木県内の様々な領域で活躍する東学大の卒業生・修了生です。和気あいあい、楽しい、おしゃべりの花を咲かせます。同窓生がそれぞれの職場で頑張っている姿を確認しあうことは、本当に楽しく、励みになります。

2019年度の支部総会・懇親会は、次の要領で開催しました。

日時:2019年10月26日(土曜)18:00~

場所:チサンホテル宇都宮1階

内容:2019年度支部活動報告・2020年度支部活動計画等
追記 東京学芸大学が応援するにふさわしい、教育・文

化・スポーツの大会・行事等が、栃木県内で開かれる時には、
辟雍会栃木県支部は、「東京学芸大学旗」を掲げて応援に駆けつけます。応援するにふさわしい行事、eventがありましたら、ご連絡ください。

辟雍会栃木県支部代表 柏瀬省五
(1968年B類英語科卒)



「日光いろは坂女子マラソン」を応援する 2017.11.26

埼玉県

辟雍会埼玉県支部総会は、令和元年7月6日(土)山村学園高校会議室をお借りして開催されました。今年度も役員中心の11名の参加という寂しい会ではありましたが、2名の新メンバーの参加があり、近況報告、協議、山村学園高校の施設見学そして総会後の懇親会と大変盛り上がり、お互いの親交がより深まる機会となったと思います。

埼玉支部では、総会の他、研修会、ホームカミングデーへの参加、大学からの教員採用試験対策事業、近県学校訪問事業への協力等の活動を行っています。今年度も昨年度に引き続き、同窓生である富士見市山口教育長や川勝校長先生のご理解をいただき諒訪小学校での学校訪問事業を実施し、10名の学生さんが参加しました。

総会では、毎回、会員の発掘と行事への参加者の増加ということが課題として話題になりますが、本支部は、高校

籍の教員(経験者)が中心であり、義務教育籍の教員や他業種への周知が必要かと思われます。今回のように同じ職場や近隣の職場への声掛けが有効だととの意見もありました。活動内容の魅力化はもちろん、親睦を中心とした気軽な参加できる会合を開催していくとの確認もされました。10月中旬には、研修会を予定しています。

教育界は大きな変革期を迎えています。辟雍会が、校種や業種を超えた情報交換の場となり、教育現場や母校の学生に還元できるよう同窓の輪を広げていきたいと考えています。

事務局次長 岩澤正明
(1983年B類保体科卒)

千葉県

千葉県支部は、今も船橋市やこの近隣の市町村に在住または勤務する卒業生を中心の団体です。現在の会員数は36名で、県内の教職員や学校管理職の方、企業にお勤めの方、すでに退職され今でも教育に携わっている方など職種も年齢も様々になっています。毎年、市内から県内へと情報を伝達して会員の和を広げ、会員数を増やそうと考えています。

主な活動である定期総会懇親会では、会員の年齢差に関係なく、在学当時の想い出や卒業後から今日までの状況、近況報告などを交換しています。また、諸先輩からは、若手の会員の方々の悩みを受けたり、将来に対するアドバイスもおこなったりしています。

大学卒業後は、それぞれが社会に独り立ちしていくわけですが、将来に対する希望など、上司に相談する前にアドバイスを受けると言ったケースも出てきました。

今年も秋に船橋市内で定期総会を予定していますので、多くの皆様の参加をお待ちしています。県内には、私たち千葉

支部とは別に高校の管理職を中心とした先生方の団体もあります。千葉支部へ入会希望の学生諸君は、下記の連絡先でお待ちしています。

千葉県支部事務局長 石井康雄
(1982年A類数学科卒)
(元船橋市立金杉台小学校長)

自宅住所:船橋市前貝塚町1010-18
電話番号:047-438-9380(自宅) / 090-3472-3788(携帯)



神奈川県

令和元年、横浜開港160周年、辟雍会神奈川支部会の総会は9年目、新たな道を歩むべく開催してまいります。今まで様々な分野の方々のご講演を通じ、多様化した社会で生きることを学んでいます。その後、食事を共にし和合の懇親会も開催しています。一日研修の場も設定し、現代社会の生きる課題を知り生き合うことの大切さを実感しています。昨年度は本部から馬渕貞利会長にご参加いただいた総会・懇親会でした。講演内容は「多文化共生社会における外國につながりのある生徒の現状と高等学校の役割～高等学校におけるネパール人入学生徒に関する一考察～」このテーマで、本多秀吉さんにいただきました。今年度は木村則夫さんに「『書のよもやま話』文字の起源から現代の・美文字・へたうま文字、筆順の正しい知識、高等学校書道では何をどのように学ぶのか」と、幅広いテーマで高等学校の書道教育についてを講演していただく予定です。

来年度は開会10周年になります。充実発展に向けて邁進いたします。

神奈川支部は常に、
①学校現場での若い先生の悩みを聞く機会として
②現場を踏まえた、0歳からの教育の継続性について確かなものにする具体的策の提供として
③各種の研究の実情理解として
互いに学び生きるを感じ合う場を大切にし、計画実践の機会を充実させます。

神奈川支部会長 萱野政徳
(1974年A類保体科卒)



2018年度(11月17日)総会にて

山梨県

2012年8月に設立された辟雍会山梨県支部は、鷺山前会長をお迎えして第1回の集まりを開きましたが、今年は8月17日に現会長の馬渕貞利先生をお迎えして同じ石和の会場で数年ぶりに懇親会を開くことができました。参加者は7名(初回は20名)と少なくて残念でしたが、上は1976年卒の卒業生から、下は2011年卒の卒業生まで、幅広い年代の卒業生が集まり、在学当時の思い出や卒業後から現在までの状況を語り合いました。個人的には、私は馬渕先生の朝鮮近現代史ゼミで勉強して卒論も大学院の修論も指導していただいたので、馬渕先生と親しくお話できてとても楽しい時間を過ごすことができました。来年以降も毎年8月頃に懇親会を開き、会員の輪を広げていきたいと思います。

辟雍会山梨県支部 事務局 鮎澤 譲
(1984年A類社会科卒)



富山県

富山県の「獅子の会(辟雍会富山県支部)」は、昭和50年頃に、数名の仲間の不定期な集まりから始まったそうです。その後、平成2年に規約と名簿を作成して以来、毎年集まって親交を深めています。現在、県内在住の名簿搭載者は約300名となっています。

平成30年度も8月24日に総会・懇親会を開催し、23名の参加者を得て、盛大に開催することができました。参加者は仕事も年代もばらばらですが、サークルが同じだったり下宿が近所だったりと、同じ年代を同じキャンパスで過ごしたということだけで共通の話題が生まれ、旧知の間柄のように話が弾みました。大学の特性上、教員が多いのですが、放送局の方や議員等職種も様々で、参加者全員が、あの日に戻れる貴重な場となっています。

会の締めくくりは、いつも参加者全員が輪になって「若草もゆる」を歌います。学生時代にはほとんど歌うことがなかつたこの歌を、この会に参加することで覚えたという方もたくさんおられます。そして、数年前に会の旗を作成したのをきっかけに、旗のもとで写真を撮影して会を閉じています。

私たちは、これからもこの会の絆を大切にし、少しずつ仲間の輪を広げながら、未永く会を育てていきたいと思っています。

獅子の会(辟雍会富山県支部)
事務局 草野 剛(1990年A類国語科卒)



「獅子の会」の旗のもと

新潟県

辟雍会新潟県支部は、全国で12番目に平成23年(2011年)8月28日に設立されました。生涯にわたって会員の親睦を図ることを主な目的として活動を始めましたが、設立に大きく関わった支部代表木澤英二(昭和57年卒)の突然の死去に伴い、会員名簿の引き継ぎ等が十分できないま活動休眠状態で数年が経過しました。昨年から一念発起し、活動の再開を期して組織づくりがスタートしました。

塙 佐敏(昭和56年卒)を新代表として、内藤慎一(昭和56年卒)、田村 篤(昭和60年卒)、小林 武(昭和60年卒)、玉木 浩(昭和56年卒)4名で事務局を組織しました。平成31年3月20日に市内某会場にて事務局会を開催し、今後の活動に向けて確認がなされました。(1)会員の確認:新潟県内で退職者を含め265名の会員名簿(主に教員籍)を作成。(ただし、平成29卒まで平成30卒は不明) (2)辟雍会新潟県支部の存在の周知:はがき等で全会員に紹介する。(3)支部総会の開催:年度内開催に向けて準備する。(4)課題:①

活動費用がないため、案内等を発送する際の通信費や資料作成費の捻出。②どの程度会員として賛同が得られるか。③会員が多く県内に広く活躍しているため、組織を細分化して活動の充実を図っていく等。

辟雍会新潟県支部代表 塙 佐敏
(1981年A類保育科卒、平成31年4月より
愛知学泉大学准教授として赴任)
代表代行 玉木 浩
(1981年A類社会科卒)



新潟県支部事務局会(3月)

静岡県

静岡辟雍会は、東日本大震災の起こった2011年に誕生しました。以降、総会と講演会を毎年、夏に行ってきました。総会と講演会という形は、発足当時から変わりません。

今年の講師は、東京学芸大学辟雍会理事で、元東京学芸大学附属国際中等教育学校副校長の小澤一郎氏にお願いしました。演題は「海外の学校事情から見た帰国児童生徒への対応」です。日本語指導が必要な児童生徒の現状、海外子女教育の現状と課題、帰国子女教育の現状と課題、文部科学省の在外教育施設グローバル人材育成強化戦略の内容、在外教育施設への教員派遣の歴史、戦後の帰国子女の受入れに東京学芸大学が果たした役割、国際バカロレアとスーパーグローバルハイスクール(SGH)などについて、写真をふんだんに用いたパワーポイントを使って



懇親会



講演会

お話し下さいました。
帰国児童生徒への対応
だけでなく、新しい学習
指導要領に対応した授
業の在り方を考える上
でも大変参考になる講
演でした。

現在、会員数は87人。
教育等の現場で働いて
いる方が半数以上を占
めています。会員数に比
して、総会並びに講演会への出席者は少なく、この5年ほど
は、30人を下回っています。今年は16人でした。現役世代
への働きかけが課題です。発足当時の熱気を少しでも取り
戻したいと、事務局はその方策に頭を悩ましています。

静雍会事務局長 勝田敏勝
(1976年A類国語科卒)

鳥取県

平成元年に「東京学芸大学鳥取県同窓会」を立ち上げて以来、今年度で31年目を迎えました。平成23年からは辟雍会鳥取県支部としても活動しています。これまで毎年1回、情報交換会と称して懇親会を開催してきました。近年では、東部地区、中部地区、西部地区の3地区の持ち回りで、企画・運営しています。昨年度は平成最後の開催、そしてちょうど30回目という節目にあたり、集まりやすい中部地区、JR倉吉駅前のホテルで、2月16日(土)に開催しました。

今回は本県同窓会の設立準備段階からずっとお世話になった小谷次雄初代会長から神戸直樹新会長にバトンタッチされて初めての開催でした。30回記念として、東京学芸大学辟雍会会长の馬渢貞利氏、東京学芸大学総務部長の所昌弘氏をお迎えし、変遷しつつある現在の大学の様子を講話していただきました。そして、恒例の参加者スピーチでは、それぞれの参加者から大学生時代の懐か

しい昔話や近況報告があり、会場は盛り上がりました。次回、令和最初の開催は西部地区です。多くのみなさんの参加を期待しています。

鳥取県支部事務局長 武田基資
(1987年B類理科卒)



開会にあたり参加者全員で記念撮影

香川県

香川県の同窓会では、この数年間、年一回ではありますか毎年懇親会を行っていましたが、ようやく昨年8月、馬渢会長をお招きして正式に辟雍会香川支部として再出発をすることがきました。これを契機に、今後ともさらに同窓会の活性化をはかっていきたいと考えているところです。

今年の会合は、高松市内の居酒屋「まるのや」にて13名参加者で実施しました。例年より若干少ない参加者でしたが、一年ぶりに再会したメンバーで楽しい会合となりました。

参加者の顔ぶれは、やはりほぼ全員が教員や教員経験者ですが、小中高の校種や専門教科、年齢層などは千差万別でバラエティに富んでいます。今年初参加の者も数名いました。会が始まってしばらくした後、参加者全員が一人ひとりが、学生時代の所属学科などを含めあらためて自己紹介をしたり、近況報告をしたりしました。毎年のことですが、小金井や国分寺のよく通った食堂や飲み屋、寮生活の話、サークル活動や

小金井祭の話などで大いに盛り上がりました。

今年度は懇親会だけでなく、何とか独自の同窓会活動ができればと考えています。他県の支部で面白い取り組みがありましたら是非紹介して下さい。よろしくお願いします。

香川県支部長 原 彪
(1979年B類社会科卒)



2018年8月 香川県支部立上げの会

高知県

高知県内には60名程の学芸大出身者が在住し、年に1回程度懇親会を開催し親睦を深めています。平成30年3月28日(水)に実施し、もう1年以上すぎております。もうそろそろ懇親会をしないといけない時期がきております。

高知県に在住されている方で、この「支部だより」のスペースを読まれた方は、支部長の宮地か事務局の中山のメールアドレスまたは携帯電話まで連絡をいただきたいです。

懇親会の案内をさせていただきますのでよろしくお願いします。和気あいあいとした和やかな会です。

ちなみに平成30年3月28日の参加者は、宮地彌典(高知支部長:1974年D類保体科卒)、大西正子(1975年D類書道科卒)、柚村 誠(副支部長:1977年D類保体科卒)、西 緑(1977年D類美術科卒)、黒瀬忠行(1985年D類數学科卒)、宇賀孝篤(副支部長:1988年A類保体科卒)、若江卓恭

(1988年A類理科卒)、西内一人(1989年D類保体科卒)、池添伊佐子(1992年N類生涯スポーツ科卒)、田所良夫(1994年A類數学科卒)、松山 宰(1990年B類數学科卒)、中山泰志(1990年D類數学科卒)の12名でした。

支部長 宮地彌典(1973年D類保体科卒)
TEL:090-5911-5088
メールアドレス:m-hirosuke@miyajigakuen.jp

副支部長 柚村 誠(1977年D類保体科卒)
宇賀孝篤(1988年A類保体科卒)

事務局 中山泰志(1990D類數学科卒)
TEL:090-4976-9220
メールアドレス:k-kobun@titan.ocn.ne.jp

大分県

ほっとするつながりを大切に「おんせん県おおいた」

大分辟雍会が平成26年に設立されてから今年で6年目を迎えることとなりました。5名という少ない会員からスタートして現在42名の方々が連絡を取り合える登録会員となりました。昨年度は1月26日に大分市のアリストンホテル大分におきまして第5回総会を開催したところ、14名の同窓生が集い、再会の思いや大学時代の思い出を語り合いながら、交流を深めることができました。

辟雍会事務局からご来賓として、馬渢貞利会長をお迎えし、大学の近況や辟雍会の新たな取組についてのお話と合わせ、本支部の活動へのねぎらいのお言葉をいただきました。馬渢会長は、平成27年から4年連続で出席され、会員間でも一番懇意にされる存在で感謝しております。参加者は、毎年参加している方々や久々に再会した方々、そして初めて参加された方々という状況で、お互いの近況報告の交流はもちろんのこと次回の約束もし合いながら親睦を深めることができました。

本年度参加された会員の中には、大分大学で教鞭を執られている方やラグビーワールドカップ2019の大分会場事

務局として尽力されている方も参加され、懐かしい大学時代のエピソードから郷土の話題へと花開きました。短い時間ではありましたが、会員の皆さんと楽しいひと時を過ごすことができました。また、卒業して間もない若い会員さんも参加していただくことで、年代を越えた大学の様子を知る機会となりました。

他支部の皆様も、是非「田舎暮らし日本一、おんせん県おおいたの魅力」を発見してみませんか。

大分県支部長 濑口卓士
(1989年A類社会科卒)



佐賀県

佐賀県支部の会員数は、現在16名(2019年8月現在)です。

構成メンバーは、教育関係者が12名、マスコミ(テレビ局)4名になります。年齢層が若いというのも佐賀支部の特徴かもしれません。

県外に転勤されているマスコミの方々も、定例会に駆けつけてください、近況報告をマメに行なっております。

活動は年に数回支部会を開催し、それぞれの業界の話題に花咲かせながら、佐賀の地酒を飲み交わしています。今年は趣向を変えて熱気球に乗っての交流会を企画しています。熱気球は冬が本番なので、これからの季節に実現できることと嬉しいです。そのための勉強会を1月に行いました。熱気球の話題はもちろんのこと、それぞれの近況報告も行いました。

新しいメンバーもたくさん加わり、いろいろな業種が混

ざった佐賀支部です。これからもいろいろな可能性に挑戦したいと思います。

佐賀県支部事務局長 小松原修



2019年1月 佐賀県支部総会

宮崎県

平成12年より保健体育科出身の十数名でスタートし、宮崎市で開催していた会を平成26年より全科に広げて3年間にわたり行ってきました。そして、平成28年2月に支部設立総会を盛大に開催することができました。

令和元年9月には、各年代の代表者出席のもと、次回開催に向けた幹事会を開きました。自己紹介、近況報告、思い出、それぞれの立場での今後の取組について意見等が出されたところでした。

300名近い名簿を作成したことにより、幼・保、小・中・高・特別支援学校、大学、教育委員会等の教育界をはじめ、様々な分野で多くの卒業生が活躍されていることが分かります。会の発展により、良きつながりがさらに生まれればと思います。

今後の課題としては、①連絡体制の改善・充実、②ホームページ等を活用した活動状況の周知、③新会員の発掘と参加促進、④著名な方を招くなど学びや魅力ある企画、⑤組織的な取組で持続可能な運営などが挙げられています。

知恵をいただきながら、会員の協力の輪を広げ、支部を発展させていきます。興味ある方はぜひ連絡をいただきたいです。新しい風を吹かせてください。

会長 矢野久紀(1965年甲類保体科卒)
副会長 押方 修(1984年A類数学科卒)
黒木 貴(1985年A類社会科卒)

次回の支部会予定

期日等 令和2年5月～8月頃の土曜(宮崎市内)
連絡先 宮崎県支部事務局長 村中田 博

(1995年A類保体科卒:宮崎県教育庁スポーツ振興課)

メール:hm110629@gmail.com



東京学芸大学辟雍会支部連絡先一覧(2019年8月現在)

● 北海道支部 連絡先 中村雅之
TEL:090-2874-2945 E-mail:m-nakamura1125@outlook.jp
「カムバック・サーモン! 北の大地(北海道)は、皆さんの凱旋を待ってまーす。」

● 青森県支部 連絡先 里村 輝
TEL:090-8781-7482 E-mail:satomura-akira@m05.asn.ed.jp
「学芸大青森キャンパスでは、同窓生が楽しく友好を深めています。夢の続きを青森で。まずは連絡ください。」

● 岩手県支部 連絡先 日野澤明彦
E-mail:ptf62-akihiko-h@iwate-ed.jp
「故郷岩手での皆様のご活躍を期待しています。スポーツの力で岩手を元気にしていきましょう!」

● 栃木県支部 連絡先 柏瀬省五
TEL:0284-62-6229 E-mail:shogoka@ca3.so-net.ne.jp
「栃木県の教育・文化・スポーツを支援する楽しい懇親会です。栃木に来たら連絡してね!」

● 群馬県支部 連絡先 須永 智
TEL:090-7849-1059
「お互い、情報交換をして、日々の活動に役立てましょう。年末に支部総会懇親会を予定しています。」

● 埼玉県支部 連絡先 阿部博之
TEL:048-862-6857 E-mail:h-abe618@xa2.so-net.ne.jp
「本音で語り合える同窓生のネットワークは強い味方です。若い力で埼玉を盛り上げてください。」

● 千葉県支部 連絡先 石井康雄
TEL:047-438-9380、090-3472-3788 E-mail:ishaso.fuki@gmail.com
「千葉県在住の同窓生のネットワークが必要です。千葉県支部へ加入してください。お待ちしています。」

● 神奈川県支部 連絡先 原 英喜
TEL:090-9800-5831 E-mail:hhara@kokugakuin.ac.jp
「世界に夢を!そして、国内でも夢を!苦労を語れる仲間、同窓生のいることを忘れずに。」

● 山梨県支部 連絡先 鮎澤 謙
TEL:080-1217-1364 E-mail:yayuzawa@outlook.jp
「会員の輪をさらに広げ、楽しく集みたいと思っています。気軽に連絡くださいね!」

● 新潟県支部 連絡先 玉木 浩
TEL:090-9741-7520 E-mail:h01tamaki@yahoo.co.jp
「越後に輝く獅子の星座のもと、集い、語り、絆を深めよう!おめさん方が戻ってくるのを待ってるってば!!」

● 富山県支部「獅子の会」 連絡先 上市町立上市中央小学校 草野 剛
TEL:076-472-2222 E-mail:kusano-tsuyoshi@ym.ed.jp
「富山では280人以上の方ががんばるよ。富山に戻るときには連絡しられ。まっとうちゃん。」

● 石川県支部 連絡先 新村裕二
TEL:090-5689-5618 E-mail:shinmura_yuu@city.kanazawa.lg.jp
「ふるさとは、あなたの帰りを待つよ。新幹線かがやき号で帰ってきました!」

● 福井県支部 連絡先 小林弥寿夫
TEL:090-8704-7562 E-mail:y-koba2020@lime.plala.or.jp
「かたいいわけのお! うらら、あんたが福井へ帰ってくるの 待ってるんやざあ 早よお~ 帰ってきてねの!!」

● 静岡県支部 連絡先 勝田敏勝
TEL:090-7046-6228 E-mail:katstuta@zm.commufa.jp
「若いしゅう田舎でいっしょにやらまいか!」

● 近畿支部 連絡先 木野康裕
TEL:079-420-0100 E-mail:kino@aigaku.gr.jp
「『よし、明日から、また頑張る』のエネルギーを持って帰って頂ければ嬉しい限りです。いつもご連絡ください。」

● 鳥取県支部 連絡先 武田基資
TEL:0858-22-2037 E-mail:takeda_mt@mail.torikyo.ed.jp
「砂丘も大山も三徳山も、あなたの帰りを待つとるで。県人会発足30年、今年も集まります。まずはご連絡を。」

● 島根県支部 連絡先 玉林尚之
E-mail:tamarin511@sky.megaegg.ne.jp
「まめておっちゃんさい。若い力まっちょーん!」

● 岡山県支部 連絡先 宰相裕一
TEL:090-3746-8807 E-mail:hy-tkn@mx1.tamatele.ne.jp
「ざくばらんな会です。岡山に帰ったら、気軽にご連絡ください。」

● 広島県支部 連絡先 田中信也
TEL:090-4806-7177 E-mail:s_tanaka@hiroshimaymca.org
「広島に戻ったときはぜひ連絡を。個性豊かな先輩たちがお待ちしています。」

● 香川県支部 連絡先 原 彪(たけし)
TEL:090-8699-3434 E-mail:st-hara1128@ma.pikara.ne.jp
「皆さんが故郷に帰って来ることを楽しみに待つよるけんな。」

● 高知県支部 連絡先 中山泰志
TEL:090-4976-9220 E-mail:k-kobun4769@docomo.ne.jp
「ひろめ市場の雰囲気の懇親会をしています。メールでもかまいませんので気軽に連絡して下さい。」

● 佐賀県支部 連絡先 小松原修
TEL:090-1089-8832 E-mail:samukomatsubara@yahoo.co.jp
「教育に携わる卒業生とマスコミに携わる卒業生でがんばり調和がとれています。バルーンに乗って同窓会であります!」

● 熊本県支部 連絡先 藤田まり子
TEL:096-357-9417(熊本市立合小学校)
E-mail:fujita.marikoB@city.kumamoto.lg.jp
「阿蘇に負けんパワーと、天草の海のごとく綺麗な心で、熊本の学校を元気にするためにがんばつるばい!」

● 大分県支部 連絡先 瀬口卓士
TEL:090-9070-2962 E-mail:seguchi-takuji@oen.ed.jp
「日本一の温泉県大分でまっちよるけん!卒業したてのわけえ先輩も入れて35名のみんなが仲いいけん!連絡してなし!」

● 宮崎県支部 連絡先 村中田博
TEL:090-8831-8076 E-mail:hm110629@gmail.com
「みんな誰かとつながりよって、てつげなおもしりっちゃがー。ひたまたがるわ。連絡しないよ。待つよるけん!」

● 鹿児島県支部 連絡先 雲井未歎
TEL:099-285-7766
「鹿児島では、桜島が毎日噴煙を上げています。その力強い始動は鹿児島の全ての同窓に届いているはずです。支部の和も同じように広がってほしいと願っています。」

● 韓国支部 連絡先 金 範洙(キン ボンス)
TEL:090-6106-0493
E-mail:bskim77jp@yahoo.co.jp
bskim77@u-gakugei.ac.jp

卒業生から



バスケットボール部での4年間 人との関わりが人を育てる



辟雍会副会長　臼木信子

学生番号A1-960 昭和41年4月
A類保健体育科入学。すぐにバスケットボール部に入部する。

4年間のバスケットボール部での活動は、大学の先生方を始め、多くの人とのかかわりの中で充実した学生生活であった。特に1年から苦楽を共にしてきた同期の4人(キド・クル・スー・クリ)のメンバーには、感謝をしている。

先日、クローゼットの奥から、「バスケットボール」と書いてある段ボール箱を見つけた。

大学での4年間のバスケットボールクラブでの記録、12冊のノートとリーグ戦や全日本インカレ、全国教育系7大学のパンフレットに入場券、4年分の「部のあゆみ」等が出てきた。ノートには、練習のメニューにその日のポイント、合宿の記録、先生やコーチ、先輩方からいただいたご指導、そして、リーグ戦や大会、合宿後の反省レポートの下書き等が記録されていた。読み返しているうちに、バスケットボールにのめり込んでいた4年間がよみがえってきた。

3年のリーグ戦、2部で優勝し入れ替え戦で勝ち、念願の1部リーグに昇格したこと。選手層の厚い私立の体育大や全日本での大型選手のチームといかに戦うかを話し合い、コンビネーションやフォーメーションを自分たちで進めていこうとしていたこと。4年のリーグ戦で1部5位。全日本インカレを最後に現役選手としての生活を終えたこと。

1年生の時から試合に出してもらっていたが、こんなに背が低いのにバスケットをやるのは無理ではないか。陸上部からの勧誘もあり思い切って陸上をやった方がいいのではと思ったこともあった、しかし、中学の時から好きで続



けてきたバスケット。「4年生の齊藤さんや慶應大学のリードマンのプレーを見て、誰にも負けない名リードマンになってみよう。」と、1年のリーグ戦が終わった時に強く決意した。

バスケットボールを始めたのは中学1年から、「バスケットボールをすると背が高くなる」という部員勧誘の言葉と女子部員が少なくバスケット顧問の体育の先生に勧められたのがきっかけだ。弱小チームだったがパスとシュートの基本練習とフットワーク、1・2年の男子部員と一緒に練習に体力とスピードがついた。しかし、身長は、151センチまでしか伸びなかった。

父の転勤で埼玉に転居し、川越女子高校に。勿論バスケット部に入部。そこで、学芸大学4年生の下田宏吉コーチ(現辟雍会埼玉県支部の会長)と出会い、次のコーチも学芸大学バスケット部の加藤健一コーチ。お二人のコーチは、身長の低い私にドリブルとミドルシュート(今の3点シュート)にチームとしてのポジションとバスケットボールの楽しさを教えてくださった。

バスケットをするなら体育科へという事で、川越女子高校の先生方にも陸上部、体操部、ダンス部等部活の指導の合間に実技の特別指導をしていただいた。暗くなったり校庭を一人で走り続けていた。勿論、加藤コーチのもと下級生とのバスケの練習にも。

そして4年間、小さなバスケット選手として、チームゲームだからできるバスケットボールの楽しさを探ってきた。授業の間の空き時間に、男子上級生と大体育館で自主練習をしたこと、入れ替え戦前に男子OBの方が仕事を終えたあと練習相手をしてくださったこと。そして、リーグ戦や、入れ替え戦の時には、部活の中学生を連れて応援に来てくださったこと。

自分たちだけでなく、多くの人の繋がりの中で育てていただいていることを強く実感していた。

また、男子監督だった関四郎先生(後の学長)から代々木体育館でのミニバスケット教室の指導に声をかけていただいた。卒論も「小学生のバスケットボール」とし、関先生の研究室でもお世話になった。私が小学校教員になり、ミニバスケットボールを指導するきっかけにもなっている。

板橋区豊島区での38年間の教職生活(教頭5年校長12



年)と板橋区教育委員会での5年間に多くの方々との出会いがあり、たくさんのこと学ばせていただいた。中でも学芸大学に入学しバスケット部で出会った加藤正克先生(現辟雍会副会長・元一般社団法人東京学芸大学同窓会理事長)には、板橋区での体育部・東京都の体育研究員・東京都学芸大学同窓会で、そして学芸大学辟雍会でと、長い間お世話になり続けている。

辟雍会の理事から副会長になって10年が過ぎるが、埼玉県支部設立の時には、バスケットボール部繫がりで、阿部博之先生に事務局長としてご尽力いただき、会長を下田宏吉先生(山村学園元校長)が引き受けてくださった。私も、埼玉県支部副会長として、キャリア支援課との近県学校訪問事業を進めて3年になる。富士見市の山口武士教育長も学大バスケット部だったこともあり、市内の学大卒業の校長先生・先生方に講師として教員を目指そうとしている学生に学校体験や研修の機会を作っていたりしている。

学芸大学辟雍会は、多くの人の繋がりの中で、人を育てているのです。

現在、日本赤十字社東京都支部青少年・ボランティア課に嘱託の指導講師として勤務している。豊島区での教頭時代、板橋区での校長3校・1園で、青少年赤十字加盟校として、教育活動を進め、指導者協議会や実践校として東京都支部にかかわってきたこともあり、今できる事をと、支部からの依頼を受けて、登録式や一円玉募金の受領等の学校訪問で園児や全校児童向けに話をしたり。福祉体験活動や防災や人道の研修会で、先生方の授業づくりのお手伝いをしたりと、子どもたちや、若い先生方からエネルギーをいただいている。

1970(昭和45)年卒業 A類保健体育選修



卒業生から



ナイルの水を飲んだものは再びナイルに戻る。
学芸大の水を飲んだものは…

JICA就学前教育プロジェクトチーフアドバイザー
ペパーソンキッズアンドユース代表 神谷哲郎

24年前とは違って見えた桜並木

教員になる前に自分の造形・創作活動の経験を活かしたいと思った私は、青年海外協力隊に応募して合格した。しかし、それから私の人生は当初予定していたものから大きく外れていき、国際協力の世界で28年ものキャリアを積むことになった。



長年、海外に住み日本を見ていた私はいつの間にか“評論家”になっていた。日本の教育はここがおかしい、こうあるべきだと御託を並べる人間に、である。そんな自分がどうしても許せなくなった私は、東日本大震災を機にエジプトの仕事を辞し、東北でのボランティア活動に参加して、子ども子育て支援の会社を立ち上げた。そこから湯水のようにお金を費やす日々が始まったが、JICA（国際協力機構）という看板のない中で新たな教育事業で信頼を獲得することは至難の業であった。また、「働く家庭に寄り添う子育て支援」という謳い文句とは裏腹に、自分自身は家族と過ごす時間がなくなっていた。海外での仕事を掛け持つしあることもあって、3人の子どもたちには“父親不在”的生活を強いることになった。



私の父は物書きだ。私が小3の時、4畳半の書斎で「おやじの背中」というエッセイを書いていた。その思い出もあってか、私は「背中が語る」という言葉が今でも好きだ。その私の背中がどう影響したのかわからないが、長女は学芸大学が気に入り、2015年に入学した。その折、私はパレスチナから一時帰国して学芸大学を訪れたが、久しぶりに桜並木を目にしたときの喜びは今でも忘れられない。桜を眺めながら、大学卒業以来、ヨルダン、ガザ、エジプト、フィリピン、イラクと渉り歩いた自分自身の半生を感慨深く振り返ったことを覚えている。

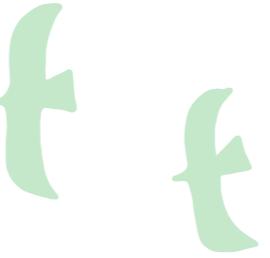
学芸大のDNA

学生時代、勉強をした記憶は正直言ってない。しかし、教育実習はまじめに取り組んだ。附属小・中学校には教育実習後も卒業まで毎週のように押しかけ、大変お世話になった。今でもご指導をいただいている水野谷憲郎先生の「子ども達が荒れて生徒指導に明け暮れないための答えは、授業を楽しく充実したものにすればよい」という言葉は、国際協力の世界にも通じるところがあり、日本で始めた子育て支援事業にはまさにぴったりと当てはまる。子ども達、保護者、地域社会からの信頼を獲得するためには、創意工夫のプログラムを作り続けること以外に方法はないということである。こういう意識や気概—それが学芸大のDNAだと私は勝手に思っている。

私は、2017年からJICAがエジプトで実施している就学前教育プロジェクトに従事している。日本で立ち上げた子ども子育て支援事業もなんとか軌道にのり、そのことも認められての登用であった。

多くの途上国では就学前教育の重要性があまり認識されておらず、就学前教育サービスは量・質の両面で課題が山積している状態である。そういう現場に飛び込んでいく、保育環境の整備や「遊びから学ぶ」実践ハンドブックの作成、保育者の研修、さらには保護者への啓蒙活動などに取り組んでいる。

また、途上国では、保育への知識不足、安い給料、



低い社会的ステータスなどによって保育従事者の離職率も高い。学芸大のDNAが發揮されるのは、そういう彼らの「やる気スイッチ」を入れるときである。学びたいという彼らの気持ちの中に冗談を交えながら染み入るように入り込み、子どもへの思いや彼らの仕事を社会に認めさせたいという強い決意を伝える。そして彼らに「やる気スイッチ」が入ると、上述の活動が展開できるようになるのである。

私の夢

私の「学芸大のDNA」が再び騒いだのは、「遊びは最高の学び!」と銘打っている学芸大こども未来研究所の存在を知ったときである。エジプト版の子ども未来研究所を設立し、おもちゃや文具、教材、絵本などを取り扱う民間企業と連携した子育て支援活動を展開し、保育情報を発信し、保育者の地位向上に取り組むこと—これが今私の夢である。

2018年11月には、カイロ大学幼稚教育学部長や社会連帯省大臣顧問ら、7人のエジプト人と一緒に学芸大学のこども未来研究所を視察した。まだまだ越えるべき課題は多いが、行政、大学、民間がそれぞれの役割を果たし、連携しながら子ども子育て支援に取り組む仕組みを構築するため、もう少し汗をかいてみようと思っている。

2021年には私が大学を卒業してから30年になる。その時、学芸大学の桜並木を見てどんな思いがよぎるだろうか。

1991(平成3)年卒業 B類美術専攻

卒業生から



日本初ダブルディプロマコースの開設

文化学園大学杉並中学高等学校校長 松谷 茂

私は大学4年生の時、文化女子大学（現・文化学園大学）の附属校としてできた文大杉並初代校長の山岸義一先生（学芸大出身・軟式庭球部OB）に「私学は自分のやりたい教育ができるぞ！」と声をかけていただき、1975年から現在に至るまで44年間、「文大杉並」一筋に取り組んでまいりました。

本校には「感動の教育」という建学の精神があります。その中で英語やファッショナブル活動などに力をいれた学校でした。私は軟式庭球部（現ソフトテニス部）の指導をして、生徒の目標である全国制覇を達成することが出来ました。

近年「グローバル人材の育成」という声が大きくなり、我が校としても「世界で活躍できる人材を育てなければいけない」という危機感をもっていました。

そこで、2015年から日本とカナダの両カリキュラムを学び、双方の高校卒業資格を取得できるコースをスタートさせました。このコースの生徒は校内に設置されたカナダ・ブリティッシュコロンビア（以下、BC）州の {Bunka Sugiyama Canadian International School (BSCIS)} と文化学園大学杉並高校の両方の学校に在籍します。授業はBC州の教員が主導し、カナダの授業は英語で、日本の授業は日本語で受けけるバ



イリンガルスタイルです。国内外を問わず難関大学への進学を目指すことができます。日本の従来の知識偏重型のカリキュラムと異なり、カナダの教育は思考力を積み上げる学習形態です。十数年前に教育改革が行われ、OECDの学力調査（PISA）でもカナダは上位に位置し、国際的に認められています。こうした新しい内容の教育を取り入れられることもダブルディプロマコースの利点です。授業内容はPBL型（問題解決型）で生徒主体の授業であり、知識記憶より思考力を養うもので、教師はサポート役にまわります。

授業数は日本とカナダの単位を充足するために1日8時間を受け講する大変さがあります。しかし、生徒自身が調べ、話し合いながら問題解決をしていくスタイルが主であり、生徒は主体的に取り組んでいます。1期生、

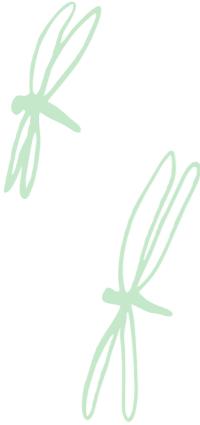
2期生と卒業生を出しましたが、英語力はCEFRのB1レベル以上であり、英検では、全員準1級、半数が1級を取得しました。日本の文科省ではインターナショナル・バカロレアを推奨しておりますが、本校のダブルディプロマコースの内容は引けを取らないものだと思います。

現在、国は高大接続システム改革を進めており、様々な検討、試行もいよいよ最終段階に入っています。私立中高を取り巻く状況は厳しさを増していますが、これからの改革に伴って必要とされる教育の整備を実施し、我が国の将来を担う子供たちに質の高い教育を実践できるようにすることが何よりも重要であると考え、今後とも努力していくつもりです。

1974（昭和49）年卒業 A類保健体育選修



卒業生から



体験型環境学習

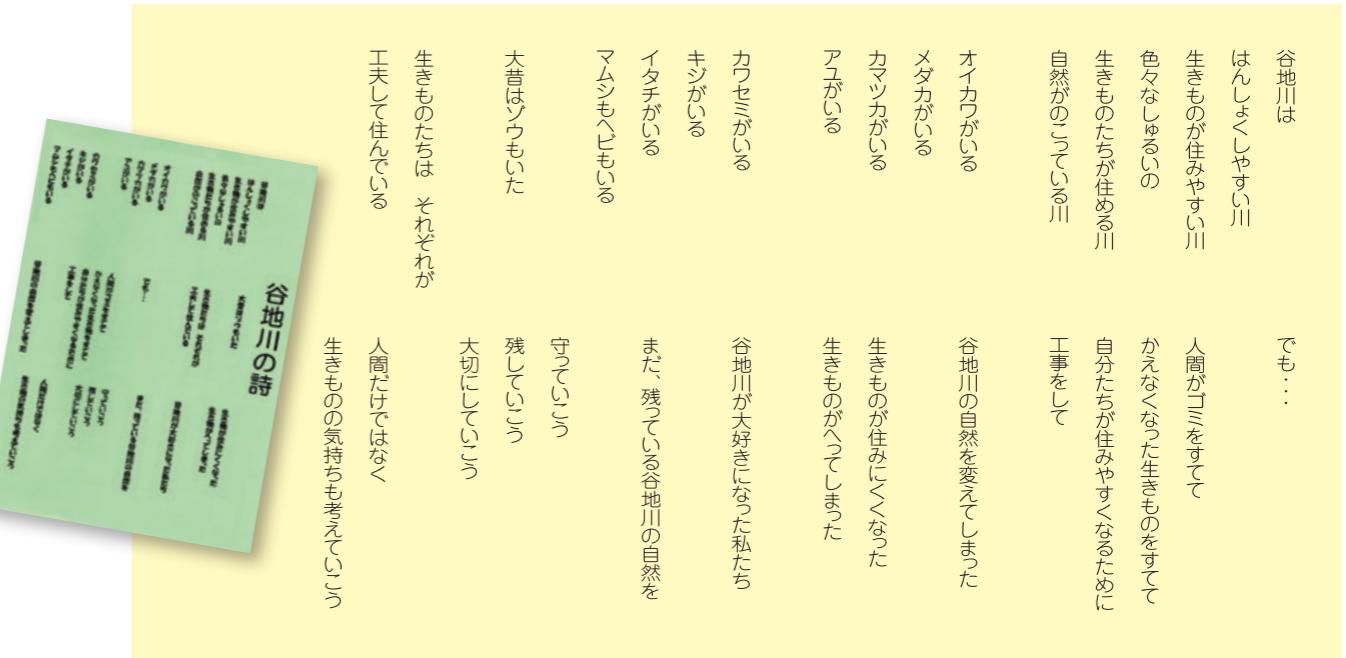
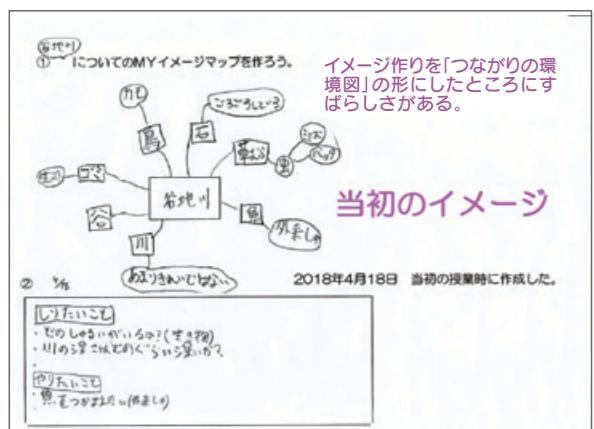
日野市立日野第三小学校主任教諭 木下朋子

私は現在、都内の公立小学校の担任をしています。昨年度、4年生でおこなった総合的な学習の時間の実践について紹介します。

本校の4年生は地域の自然環境を活用し、「ふるさとの環境をまもろう～谷地川の環境を中心に～」という学習を行ってきました。市の環境学習サポートクラブ（ひのどんぐりくらぶ）会員の井上録郎先生と連携し、川での魚捕り体験を取り入れ、四季を通して地域の環境を体験し、学習し、理解していきます。以下にその学習内容（①・②）と成果（③）を記します。

①「イメージマップ」の作成と学びの広がり：4月、谷地川についてのイメージマップを作成し、学習前の理解・興味を記録しました。4月は、一般的な知識の枠を超えない（魚がいる・石がある・ゴミがありそう…等）簡単なマップになりました。しかし、12月には、中心の谷地川から派生する多様性について考え、相互に繋がったマップへと深化しました（石→コケがついている・コイの餌…等）。

②多様な「まとめ」：一つ目は、年間を通した学びをまとめ、市の大会で他校に向け発表しました。この時、学びの中から出てきた言葉をつないで作った「谷地川の詩」という詩（次ページ）も発表しました。この詩は、校内の



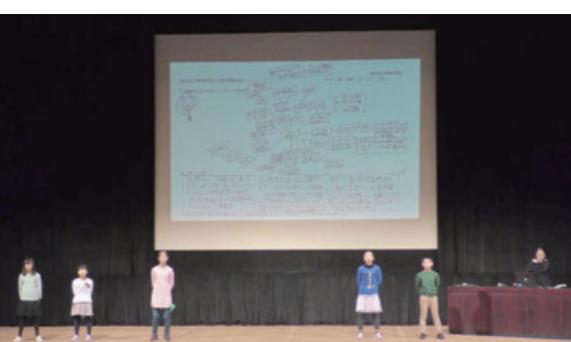
谷地川の詩

わってくださいました井上先生が「この学習は、10歳前後の成長期にある子どもに一生忘れられない楽しい原体験として身体に浸み込んだ」「学び方を学ぶ構成になっている」と高く評価してくださいました。

他市でも4年生で総合的な学習の時間に野川や浅川など川を通した環境学習を行っています。しかし、今回のように、子ども自身が学びを深めていけるような学習にはなりにくいようです。今回のような学習が成立したのは、環境についての豊富な知識を持ち、子どもたちの疑問に的確に対応し、何より子どもの興味や知的好奇心を喚起する講義を行ってくださった井上先生のお陰です。井上先生には、子どもの学びを支え広げ深化させていただいたこと・また私たち教員と一緒に授業を作っていただいたこと等、心からの感謝を申し上げます。

総合的な学習の時間に限らず、今後も地域の方と連携をとりながら子どもたちの興味や学びを広げていきたいと思います。

2001(平成13)年卒業 A類学校教育選修



平成30年度第10回日野市児童・生徒によるプレゼンテーション大会



日野市立日野第三小学校平成30年度群読発表会



情報教育とともに

文京区立茗台中学校校長 石出 勉

はじめに

私は、1982年にA類数学科に入学しました。中学校教師を目指していた私は、学芸大学のB類を受験したのですが、第二希望にまわってのギリギリの合格でした。しかし、これが運命の分かれ道だったのでしょう。この当時の出会いが、40年近く経った今でも繋がっているのです。

情報教育との出会い

学部3年の時に枠外自由科目の授業、教育情報科学演習という講座をとったのが情報教育との出会いでした。それはCAIというコンピュータが学習を管理するシステムについてというものでした。当時の私は「コンピュータになんぞ教えられてたまるか。教育は人間がやるもんだ。」などという熱い思いから、そんな講座で何を語っているかを見てやろうという不遜な態度で受講したのです。それが誤解であったことはすぐにわかりました。学習のためのプログラミングをしているのは人間であり、授業の設計をするのは教師の役目であることを知り、CAIの可能性に魅力を感じました。結局この世界にどっぷりはまり込み、



茗台中学校校舎



タブレットを使った授業



電子黒板を使った授業

その後はもっと広く情報教育の研究・実践を続けることになるのですから。

この講座は枠外科目だったので、本来数学科の私は正式のゼミを履修できませんでした。そこで、担当していた堀口秀嗣先生の研究室を当時の仲間とともに訪れ、単位の出ない自主ゼミという形で勉強会を始めたのでした。朝から夜中まで研究室に屯する学生たちを、堀口先生は暖かく受け入れてくださいました。堀口先生は残念ながら一昨年他界されましたが、このときの仲間たちとは今でも集まっては情報教育の話をする仲であり続けています。

現職教員のまま大学院に

学部を1986年に卒業してすぐに東京都の公立中学校に勤務しました。その後東京都教育委員会の派遣制度を利用して、現職のまま大学院に入学することになります。2000年のことです。当時の研究テーマは「学校グループウェアの開発」と「電子ポートフォリオの実現」に関するシステム開発でした。あれから20年近く経った今、学校には校務支援システムという形でグループウェアが導入され、eポートフォリオは実用段階に入ろうとしています。小さな研究の芽が、教育現場に根付いていく変遷を実感しています。

ICT教育の最先端をめざして

現在私の所属する文京区立茗台中学校には、すべての教室に電子黒板が設置され、タブレットPCは160台(授

業内で一人1台使用できる程度)整備されています。すべての授業で電子黒板を使い、電子教科書や画像・動画資料を提示しながら進めます。生徒は必要に応じてタブレットを持ち出し、調べ、まとめ、発表を使っています。ただ、現在は完全に一人1台の環境ではないので、その都度タブレットは元に戻さなくてはなりません。学習の記録、蓄積が次の学習に反映しづらいのが現状です。

近い将来、生徒一人一人が自分の端末を持ち、学習履歴を蓄積し、個々に最適な学習課題が提示されるようになるでしょう。そのための物的および法的な環境整備を今のうちにしておかねばならないと感じています。学芸大学で学んだ個々の学習者に最適な学習環境の実現に向けて、まだまだ恩師の教えを追求する日々を送っています。

1986(昭和61)年卒業 A類数学選修
2002(平成14)年修了 大学院 数学・情報教育専攻



学芸大キャンパスの移り変わり

椿 真智子(地理学分野・大学史資料室員)

1. はじめに

「学芸の森」と呼ばれて久しい学芸大キャンパスは、豊かな樹木や植物のおかげで安らぎや落ち着きを感じさせる場となっている(第1図)。しかし、1946年に東京第二師範学校男子部が小金井キャンパスへ移転した当時、樹木は非常に少なかった。また近年、台風・大風による倒木や枯れて伐採せざるをえない桜が年々増え続け、「学芸の森」の継承が大いに危惧される状況になっている(写真1・2)。一方、この20年間に既設建物の耐震化や改修がすすみ、大半の施設が新しく綺麗なものになった(写真3)。その施設名や機能がいつの間にか変わっていて驚かされることも少なくない。

ところで、大学の組織や教育体制の改変は細かく記録され

ているが¹⁾、キャンパスの景観については意外なほど記録に残らないことが多い。しかし、卒業生の脳裏にあるのはキャンパスの景観であり、それぞれの思い出が刻まれた「場所」であろう。

そこでここでは大学創立時から現在までの学芸大キャンパスの移り変わりを、キャンパスマップにもとづきふりかえってみたいと思う。ただし1990年代半ば以前の諸施設の変遷については、『東京学芸大学二十年史－創基九十六年史－』(1970年)ならびに『東京学芸大学五十年史 通史編』(1999年)に詳しいのでそちらをご参照いただきたい。またキャンパスの成り立ちや植栽については『辟雍』創刊号でもわかりやすく解説されている²⁾。

第1図 学芸の森イラストマップ



出典:東京学芸大学「学芸の森」Webサイトより引用



写真1 多くの桜が伐採された正門前の桜並木(2019年)



写真2 本部棟周辺の老木となった桜(2019年)



写真3 改修直後のサンシャイン(2019年)

2. 学芸大キャンパスの移り変わり

(1) 1947年の東京第二師範学校男子部キャンパス

第2図は1947年に米軍が撮影した航空写真である。近世以降、新田開発で長年の労苦のもと開墾された農家の土地は、1940年と1942年の2度にわたる土地買収により、第3陸軍技術研究所や第8陸軍技術研究所になった。その敷地の一部に東京第二師範学校男子部が池袋から移転してきたのは1946年5月のことである。

第2図 1947年の東京第二師範学校男子部敷地(明るい部分、北東部の境界は不明)



出典:国土地理院(米軍撮影)

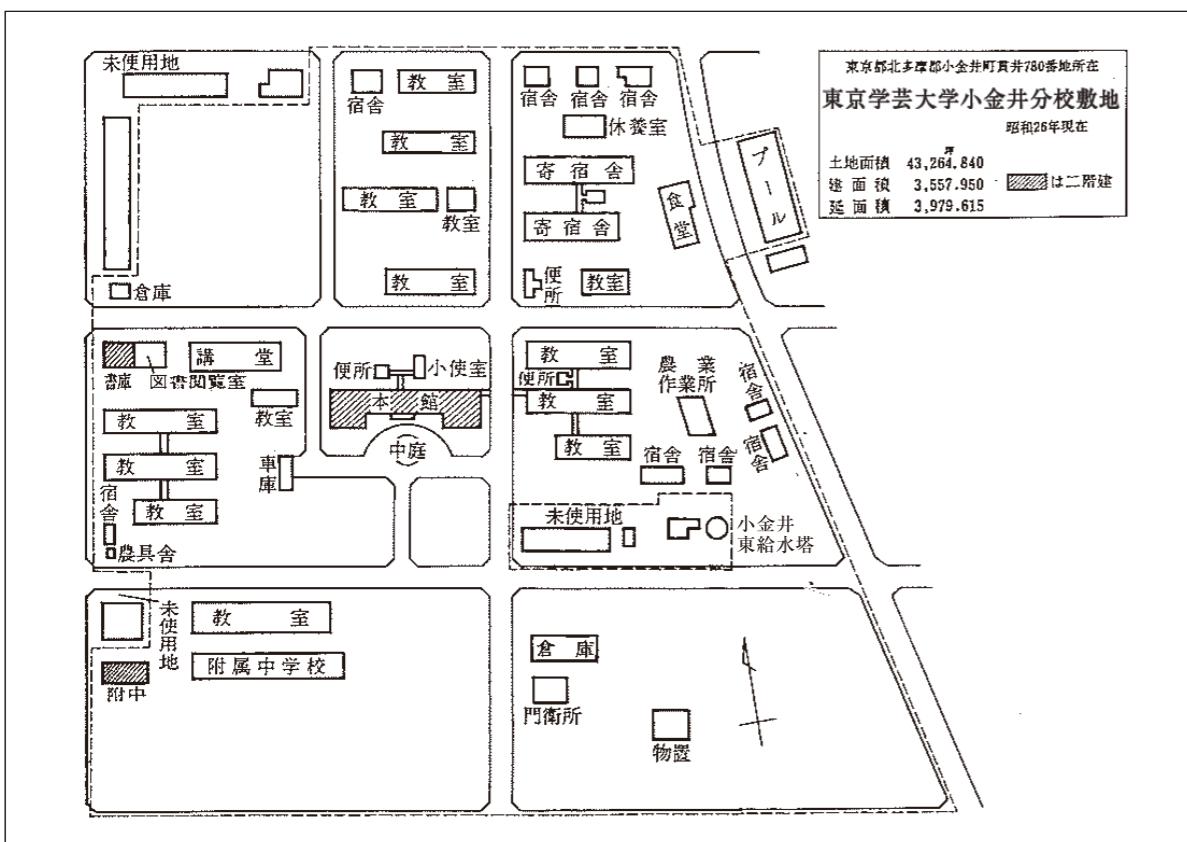
(2) 1951年の小金井分校キャンパス

さらに東京第二師範学校男子部は、1949年の新制東京学芸大学の成立により、その小金井分校(前期・2年課程)となつた(第3図)。なお、当初師範学校キャンパスとなった陸軍技術研究所の敷地は、小金井市の現・本町小学校の西側にまで広がっていたが、現在の東門近くで出火があり、アメリカ軍の指示でその東側半分が接收されてしまった。図中には、1947年の6・3制による中学校発足に伴い設置された附属中学校が開設されている³⁾。また接收を免れた新小金井街道東の旧上陸用舟艇実験プールは、1971年まで大学の授業や競技会などに利用されたていた⁴⁾。



写真4 附属中学校運動会(1951年)
現在の附属小学校体育館付近に数軒の小住宅があつた。
遠景は東門のところにある小金井東水道給水塔。

第3図 1951年の学芸大小金井分校キャンパス



出典:東京学芸大学附属小金井中学校『三十年のあゆみ』(1976年)、p.23より引用

(3) 1956年のキャンパス(第4図)

そこで、大学は現キャンパス西側半分の土地の獲得に乗り出したが、そこには戦争直後から複数の農家や企業が入居していたため土地取得は困難を極め、1954年頃によくすべてが大学用地となつた。ただし、図中には最後まで残つた「アマネ醸造」(アルコールを生産)の建物が確認できる。木造2階建ての本館周囲には平屋の兵舎を利用した教室や講堂・学生ホールが配され(写真5)、北東および東端の兵舎は宿舎となつた。なお大学の本部は、1964年の小金井地区への統合までは、東京第一師範学校男子部(世田谷区下馬)から変わつた世田谷分校(後期課程)におかれていった。

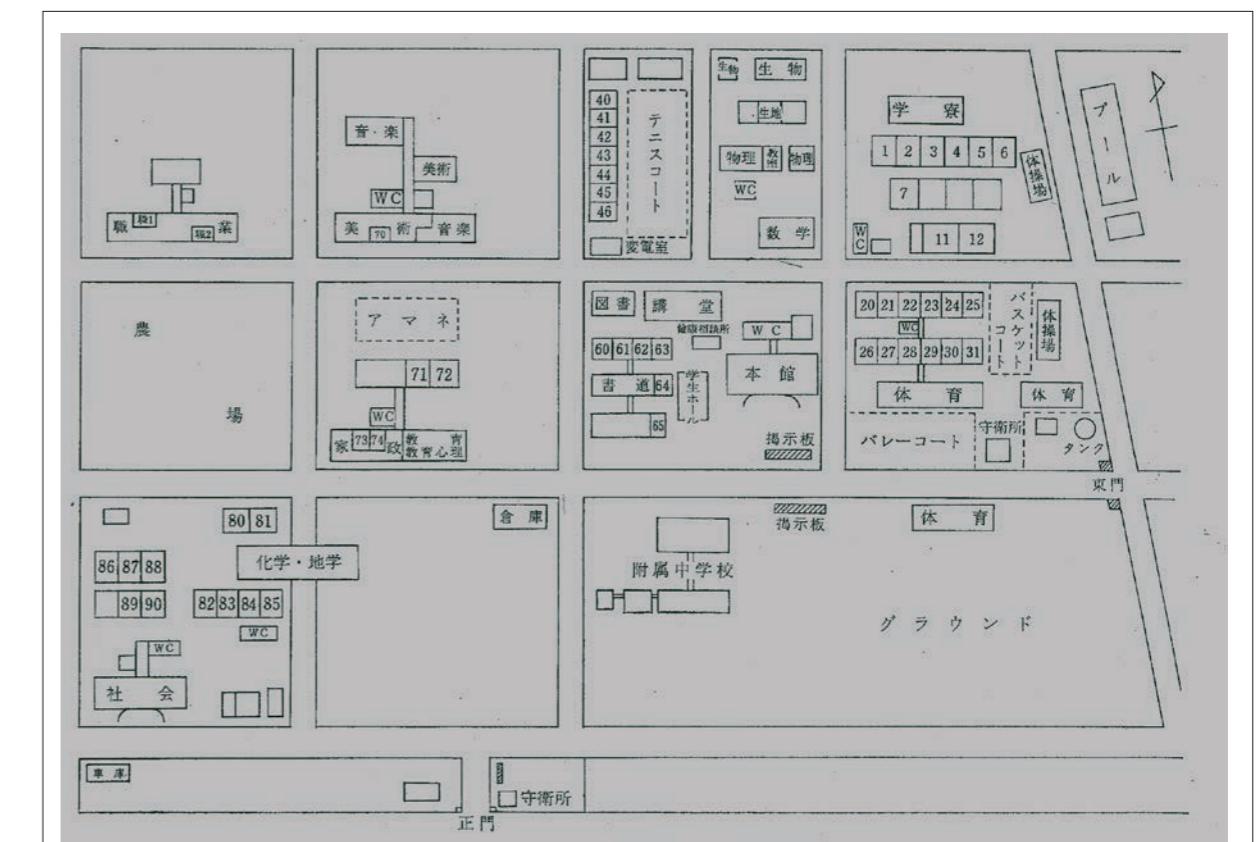
1959年に開設された附属小金井小学校の敷地は当時グラウンドであり、東門脇には陸軍技術研究所時代に建設された給水塔があつた。サレジオ通りにもつくられた2つの給水

塔を利用して、1955年には小金井町初の町営水道が開始されている。附属中学校西側の倉庫は旧弾薬庫で、1960年代まで存在していたようである。



写真5 旧大学本部棟(1961年)

第4図 1956年の学芸大小金井分校キャンパス



出典:東京学芸大学創立二十周年記念会『東京学芸大学二十年史—創基九十六年史—』(1970年)、p.70より引用

(4) 1969年のキャンパス(第5図)

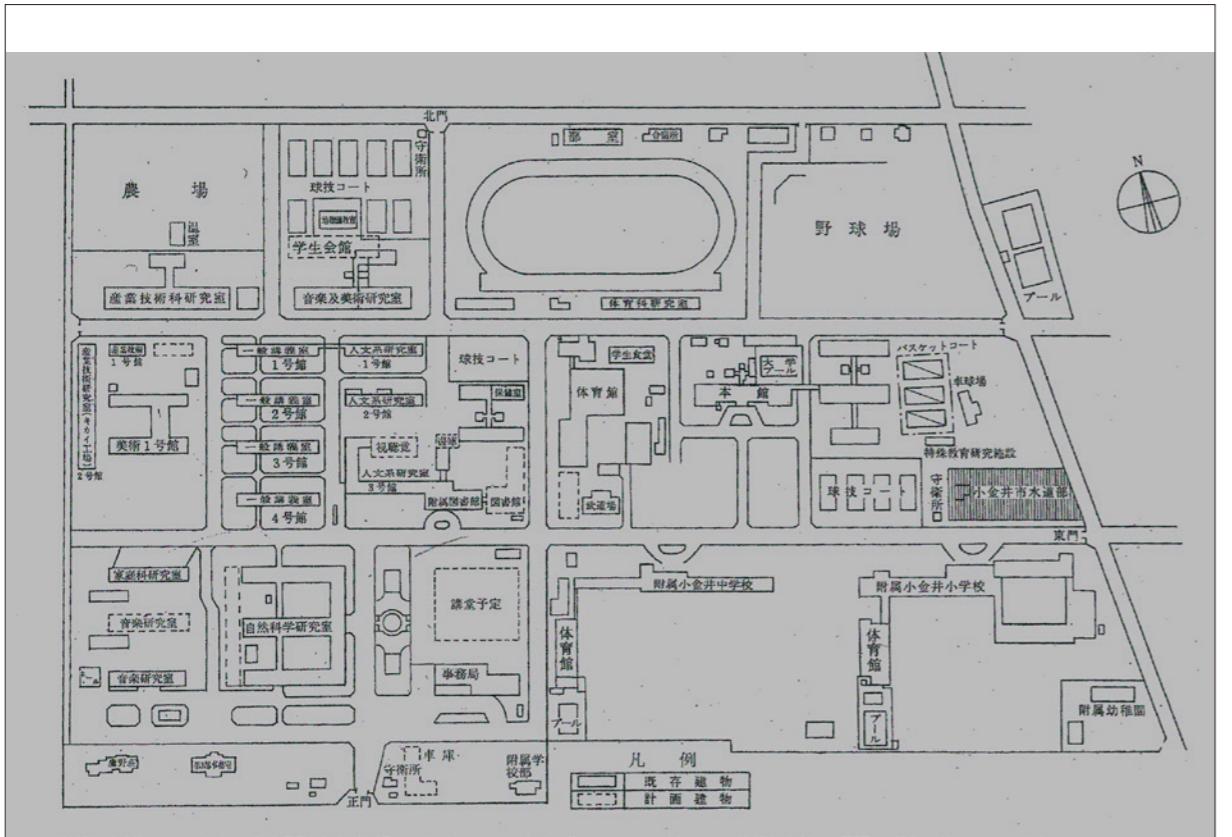
1950年代後半～1960年代には諸施設の建替えや環境整備が大きく進展し、現キャンパスの骨格が形成された。1966年には「学芸学部」が「教育学部」に改称され、修士課程が設置されるなど、教育組織が拡充された時期もある。

1954年の自然科学棟の新築、1958年にグラウンドが現在地に移設されたのに続き、1960年には附属小・中学校、一般講義棟、旧附属図書館(時計台のある人文社会2号館)の整備が始まった。その後、人文系・実技系棟と建設が続き、

1969年には事務局(現・本部棟)が完成した。第5図では事務局北側は講堂予定地となっており、現在の附属図書館が完成するのは1974年のことであった。

その現・附属図書館周辺は、学生たちが野球などをするオープンスペースであったが、1964年に広場が造成されケヤキが植えられた(写真6)。1960年代はケヤキや松・ヒマラヤスギをはじめとする樹木の植栽・整備が進み、1965年には「万葉池」も造成された。「学芸の森」の原型が形づくられた時期ともいえる。

第5図 1969年の学芸大キャンパス



出典:東京学芸大学創立二十周年記念会『東京学芸大学二十年史-創基九十六年史-』(1970年)、p.71より引用

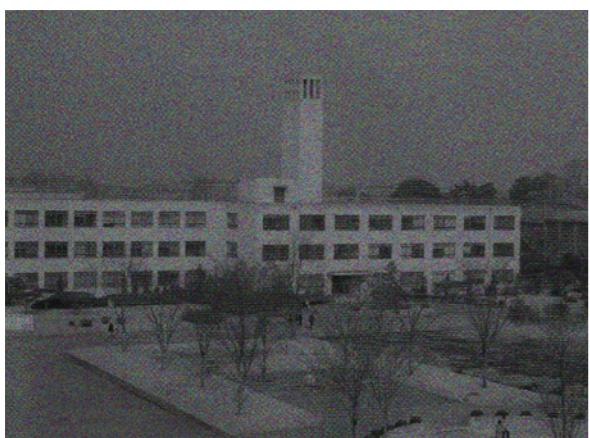


写真6 1960年代に造成された広場とケヤキ広場



写真7 旧プールにおける関東地区国公立水泳競技大会の様子(1968年)

出典:柴田義晴名誉教授所蔵

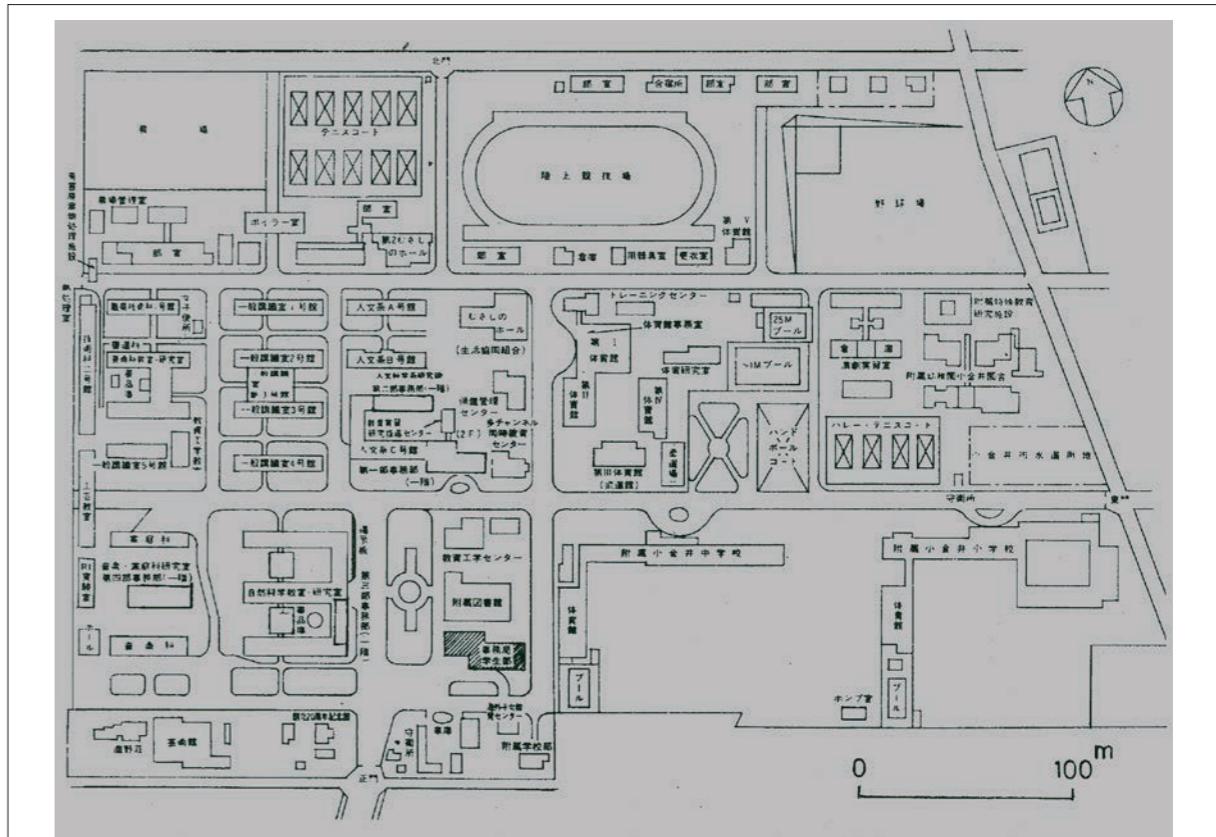
(5) 1982年のキャンパス(第6図)

1970年代には、敷地南東にあった附属幼稚園が現在地に移設されたのをはじめとして、多チャンネル同時教育センターや教育工学センターなど複数のセンターが開設され、教育研究機能の拡充がはかられた。同時に、陸軍技術研究所時代を代表する日本館がついに解体され、その跡地は50mプールとなった。一方、現在も「サンシャイン」と称され

ている9階建ての人文研究棟が1980年に完成し、当時は学内唯一の高層建築となった。

新旧交代が明瞭となった同時期には、保険管理センターや学生食堂(現・第一・二むさしのホール、写真8)、芸術館(写真9)などの福利厚生施設も新設され、学生生活の充実がはかられた。1988年には教養系が設置され、学生の多様化も進んだ。

第6図 1982年の学芸大キャンパス



出典:東京学芸大学地理学教室『東京学芸大学地理学教室 創立三十周年記念誌』(1982年)、p.64より引用



写真8 第二むさしのホール(2019年)



写真9 芸術館(2019年)

第7図 2010年の学芸大キャンパスと周辺地域



出典:施設課資料

3. 現在のキャンパスとこれから

第7図は2010年撮影の大学周辺地域の航空写真である。高度経済成長期にベッドタウン化した周辺地域の中で、本学や近隣の研究・教育施設には多くの緑が残る。1960年代に

植栽された苗木が今は見事な大木となり四季を彩っている。本学南側には苗木畠が分布して、地域性をいかした都市農業が今も維持されている。2004年には学芸大学は国立大学法人として新たなスタートをきった。

1990年代以降、講義棟の建て替えをはじめ、諸施設の改修や多目的利用が進展した。大学と小金井市・JリーグFC東京との連携事業として「学芸大クラブ」が生まれ、陸上競技場や附属中学校のグラウンドにはFC東京の寄付で人工芝がはられた。また戦前からプールがあった場所には、コンビニエンスストアを併設したコミュニティセンターが2009年に開設された。なおこの時、戦前の名残りともいえる「旧プール門」が「グラウンド門」と改称された。2010年には「学芸の森保育園」が開設され、2011年には第一むさしのホールが開放的なコミュニケーションホールに生まれ変わった。

2004年の法人化後の主な変化については、2004年度と2019年度のキャンパスマップを比較し、新設建物(第1表)と名称変更された建物(第2表)とに整理した。法人化後に新設された施設は、本学と地域・企業や各種団体との連携・協働を目的とする施設が多い。また図中に記載されていない新たな

機能も増えつつある。一方、名称変更された施設には、現代的教育課題・ニーズの高度化・多様化に対応して改編されたセンターが多く、またキャンパス整備計画のもとで2013年からいくつかの名称が変更された。

2017年「キャンパスマスターplan」には「高い知識と教養を備えた創造力・実践力に富む有為の教育者を養成」するに相応しい魅力的なキャンパスを創出するための基本理念として、①「学芸の森」に象徴される武蔵野の森が残る緑豊かなキャンパス、②地域に開かれた個性あるキャンパス、③さまざまな出会いと交流が生まれるキャンパス、④地球環境に配慮したキャンパス、の4つが掲げられている。開かれたキャンパスとしての役割・機能は年々拡大しているが、その基盤となる

キャンパスの維持継承については課題が多い。



写真10 ケヤキ広場と子どもたち(2019年)

第8図 現在の学芸大キャンパス



本部棟・図書館
学務部

- | | |
|----------------------------|---------|
| ① 本部棟 | ② 附属図書館 |
| ⑭ 学務部(学務課・学生課・キャリア支援課・国際課) | |

研究棟

- | | | |
|----------------|----------------|--------------|
| ⑨ 総合教育・人文社会1号館 | ⑮ 自然科学2号館 | ① 芸術・スポーツ5号館 |
| ⑩ 総合教育2号館 | ⑯ 人文社会・自然科学3号館 | ② 芸術・スポーツ6号館 |
| ⑪ 総合教育3号館 | ⑬ 芸術・スポーツ1号館 | ③ 芸術・スポーツ7号館 |
| ⑧ 人文社会2号館 | ⑦ 芸術・スポーツ2号館 | ④ 芸術・スポーツ8号館 |
| ⑪ 人文社会4号館 | ⑮ 芸術・スポーツ3号館 | |
| ⑤ 自然科学1号館 | ⑰ 芸術・スポーツ4号館 | |

施設センター

- | | | |
|------------------------------|-----------------------------------|------------------------------|
| ③ 特別支援教育・教育臨床
サポートセンター1号館 | ⑦ 次世代教育研究センター(1)
放射性同位元素総合実験施設 | ② 國際教育センター
次世代教育研究センター(2) |
| ④ ICTセンター2号館 | ⑯ 留学生センター | ① 環境教育研究センター |
| ⑤ 総合メディア教育館 | ⑮ 特別支援教育・教育臨床
サポートセンター2号館 | ② 温室 |
| ⑥ 保健管理センター | ⑰ 合同棟 | ③ 農園 |
| ⑤ 理科教員高度支援センター | | ④ 有害廃棄物処理施設 |

講義棟

- | | | |
|--------------|-------------|------------|
| ⑫ 西講義棟(W棟) | ⑭ 南講義棟(S棟) | ⑯ 北講義棟(N棟) |
| ⑬ 西講義棟(W110) | ⑮ 中央講義棟(C棟) | |

芸術・スポーツ
関連施設

- | | | |
|-----------------|----------------|------------|
| ② 弓道場 | ⑦ 剣道場 | ⑭ プレイパーク |
| ③ 芸術館(学芸の森ホール) | ⑧ 柔道場 | ⑦ 北門テニスコート |
| ⑧ 音楽ホール | ⑨ 舞踊場 | ⑨ 総合グラウンド |
| ⑩ ものづくり教室 | ⑪ ブール | ⑪ 卓球場 |
| ⑤ 大体育館 | ⑫ ハンドボールコート | ⑫ 野球場 |
| ⑥ 屋外バスケットボールコート | ⑬ 東門バレー・テニスコート | |

福利厚生施設

- | | | |
|-------------|----------|-------------|
| ⑦ 第1むさしのホール | ④ 小金井クラブ | ⑥ 第2むさしのホール |
|-------------|----------|-------------|

その他

- | | | |
|----------------|--------------------|--------------|
| ⑫ 正門守衛所 | ⑯ 学芸の森保育園・こどモードハウス | ⑧ 北門守衛所 |
| ⑬ けやき広場 | ⑯ 國際交流会館 | ⑩ 合宿所 |
| ⑪ 20周年記念飯島同窓会館 | ⑯ 若草研究室 | ⑬ コミュニティセンター |
| | ⑯ サークル棟 | |

附属学校

- | | | |
|--------------|------------|------------|
| ⑰ 附属幼稚園小金井園舎 | ⑯ 附属小金井小学校 | ⑯ 附属小金井中学校 |
|--------------|------------|------------|

教職大学院棟

第1表 「小金井キャンパスマップ」にみる国立大学法人化後の変化:新設

新設	建物名称	開設(建設)時期	地図番号※	新設の主な経緯や背景
教職大学院	教職大学院棟	2012~2013年度	⑧緑	2008年度に新設された教職大学院は既存施設内の狭隘な環境下にあたため、キャンパスに隣接する国有地（元小金井市水道局、約2,600m ² ）を取得、講義・演習室や大学院生のコミュニケーションスペース等含む場所として建設。2012年度・2013年度の2期工事をへて完成。2019年度から大幅に拡充・機能強化された総合型教職大学院（教育教育実践専門職高度化専攻）の拠点として機能。
施設センター	理科教員高度支援センター	(自然科学系棟内)	⑤青	2010年に理科を指導する教員を支援する目的で時限センターとして開設、2011年から常設センターとなる。基礎研修部門、専門研修部門および企画・学外連携部門を構築して事業を推進。年間とおして短期・長期・集中型等さまざまな研修を行う。
芸術・スポーツ関連施設	ものづくり教室	2012年	⑩青	2010年度から初等教育教員養成課程に開設された「ものづくり教育選修」の教育研究活動の場として建設（2015年度から「ものづくり技術選修」）。
その他	けやき広場	2013年	⑪赤	ケヤキの大木と中央に噴水のあったオープンスペースに2014年、樹木保護と「出会い・交流・発想」が生まれる場として天然木のウッドデッキを施工。学生・教職員による芸術作品の展示なども行われる。
	若草研究室	2009年	⑩緑	コカ・コーラ教育・環境朝日寄附講座の一環として設置。寄附講座終了後、管理主体者があいまいであったが、地域ボランティアを中心に有機自然農法による農作物栽培や環境教育に関連した活動を展開。
	コミュニティセンター	2009年	⑫黄	戦前、陸軍技術研究所時代に開設されたプール跡地を利用し、学生・教職員の福利厚生の充実ならびに地域住民との連携を推進するため新設。
	学芸の森保育園・こどモードハウス	2010年	⑬緑	男女共同参画の精神にもとづく教職員・学生の子育てを含む生活全般と仕事・修学の両立ならびに近隣地域住民の保育ニーズを受け、本学の社会連携推進のため開設。当時の学長が豊かな自然を生かした保育が展開されることを願い「学芸の森保育園」と命名。
	東門守衛所	2015年	⑭緑	附属幼稚園・小学校・中学校に隣接した東門のセキュリティおよび危機管理体制の強化。
名称記載なし	飯島と庭園 (20周年記念飯島同窓会館)	2009年	(①青)	20周年記念飯島同窓会館の改修工事にあわせ、枯山水の日本庭園を造成。多額の寄付金をよせられた山崎製パン初代社長夫人に因んで命名。辟雍会やボランティアにより維持管理がはかれている。
	ノートカフェ (附属図書館)	2015年	(②赤)	附属図書館の耐震化および改修工事に伴い、1階正面玄関脇に開設。大学が施設整備を行い、運営（焼きたてパン・飲料等の販売）は地域業者に委託。学生・教職員の福利厚生ならびに地域の多様な人びとが集い交流する地域連携および情報交流の拠点として機能。
	学芸大いけとおがわプレーパーク (プレーパーク)	2007年	(⑭緑)	2006年より学芸の森研究機構「里山プロジェクト」内に本学関係者・地域住民・保護者からなる運営協議会を設置し、プレーパーク事業を展開。2015年から同事業が小金井市委託事業となり、原則、毎週火曜から木曜及び土曜に活動。テニス・バドミントン・バーテント等の運動やプレーパーク活動を推進するため、水車と水車池を設置して自然体験型の遊び場を提供。

※地図番号は前ページ第8図の「現在の学芸大キャンパス」の番号に対応している。

学生に「学芸大らしさ」とは何かを議論させると、必ずあがるのは「自然・緑」「子ども」「教育・学び」であり、重要なのはそれらが相互に関係づけられている点である。またある授業で学生たちが、学内で寛ぐ子ども連れの母親にインタビューしたところ、学芸大キャンパスで好きな場所のトップは「ケヤキ広場（ウッドデッキ）」⁵⁾であった（写真10）。その理由は「安全、走り回れる、広い、きれい、気軽に来られる」とのことである。景観や場所は人が形づくるが、実は景観や場所に私たちの思考や行動が影響を受けることも少なくない。

最後に、筆者の所属する大学史資料室では毎年、本学・附属

学校園の歩みや学生生活を中心とする展示会を学内で開催し、師範学校やキャンパスの変遷についてとりあげている⁶⁾。本学の歴史をふりかえりながら、学芸大学が教育力を創造し続ける場となることを願っている。

第2表 「小金井キャンパスマップ」にみる国立大学法人化後の変化:名称変更(2004~2019年度)

名称変更	現行名称(2019年の表記)	旧名称(2004年の表記)	地図番号
施設センター	環境教育研究センター	環境教育実践施設	①黄
	特別支援教育・教育臨床サポートセンター1号館・ICTセンター1号館	教育実践研究支援センター1号館（情報教育支援部門）	③赤
	農園	実習園	③黄
	ICTセンター	情報教育センター	④赤
	次世代教育センター（1）	教員養成カリキュラム開発教育センター	⑦青
	特別支援教育・教育臨床サポートセンター2号館	教育実践研究支援センター2号館（教育臨床部門・特別ニーズ教育支援部門・生涯発達支援部門）	⑮緑
	次世代教育センター（2）	教育実践研究支援センター（教育実習支援部門）	②緑
芸術・スポーツ関連施設	芸術館（学芸の森ホール）	芸術館	③青
	プレイパーク	多目的ゾーン	⑭緑
その他	20周年記念飯島同窓会館	20周年記念会館	①青
	サークル棟	課外活動共用施設	⑤黄
番号記載なし	グラウンド門	プール門	番号なし

※地図番号は前ページ第8図の「現在の学芸大キャンパス」の番号に対応している。

注

- 1) 師範学校から現在にいたる本学の歴史に関する資料の収集・整理・保存と公開を目的として、2012年に大学史資料室が開設された。歴史資料や公文書の収集・保存・継承については多くの課題があるが、一部資料目録の公開や全国教員養成系大学・学部の目録を整理した「師範学校アーカイブズ」の作成・公開等を行っている。
- 2) 『辟雍』創刊号(2004年)の「55年~6万人が学んだキャンパス「学芸の森」=その緑はこうしてできあがった」pp.66-73参照。
- 3) 附属小学校は依然として池袋に置かれたため、児童・生徒の一部が通学するが、附属中学校は約10年間、小金井に2学級、池袋に1学級が開設された。
- 4) 旧プールの特徴や利用形態とその後の変遷については、『大学史資料室報』第3号掲載の鈴木明哲「バス停『プール前』とローリング東京学芸大学前店」pp.55-57に詳しい。
- 5) 天気のよい日には、ウッドデッキで元気に走りまわる保育園児や子ども連れ親子の姿がよく見られる。本学学生・教員等による芸術作品の展示も時折行われている。ちなみにウッドデッキの設置には「国立大学法人における保有資産の効率的・効果的活用について」に基づく大泉公務員宿舎跡地売却収入の一部があげられた。
- 6) 大学史資料室の展示会は、2013年第1回「学芸アルバム:学生生活とキャンパスの移り変わり」(於:本学附属図書館)以降、毎年開催され、今年で7回目となる。詳細は大学史資料室webサイトをご参照いただきたい。

2019年度の辟雍会奨学金給付は次のようになりました。

今年度の給付実績(カッコ内は昨年度)：奨学金A 26名(24名)、奨学金B 0名(1名)

(備考)

1. 申請対象者

奨学金 A (新入生)：東京学芸大学の入学時に、奨学金募集年度の春学期授業料全額免除を認められた者のうち20名程度。

奨学金 B (在学生)：東京学芸大学在学中に家計急変等により、就学困難な状態に立ち至り、緊急支援奨学金の給付が認められた者。
*緊急支援奨学金：日本学生支援機構又は東京学芸大学の緊急支援奨学金

2. 給付及び給付額

この奨学金の給付は在学中一回限りとし、給付金を返還する必要がありません。

給付額 奨学金 A：一律 5 万円 (辟雍会の正会員でない場合は、正会員になることを条件とする。)

奨学金 B：一律 2 万円

学校教育系学生の近県学校及び関係機関訪問

2017 年度から始まった標記の事業は辟雍会と東京学芸大学とが連携協力して行われています。これは学生の教員就職希望者への教職への動機づけを強化するために、大学より本会に協力を要請された企画です。近県を中心とした学校と連携して実施された学校訪問は以下の通り。いずれも、大学の先生とともに本会役員等が引率しました。(詳細は本会ホームページ参照)

- 富士見市立諏訪小学校 (埼玉県)
2018年10月11日(木) 実施。参加学生 5 名。
- 多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校 (東京都)
2018年10月4日(木) 実施。参加学生 3 名。
- 文京区立茗台中学校 (東京都)
2018年10月12日(金) 実施。参加学生 3 名。
- 江東区立小名木川小学校 (東京都)
2018年10月15日(月) 実施。参加学生 3 名。
- 座間市立東原小学校 (神奈川県)
2018年10月9日(火) 実施。参加学生 3 名。

なお、この企画は 2019 年度も 9 月から 10 月にかけて実施されました。埼玉県は富士見市立諏訪小学校、千葉県は国府台女子学院中学部高等部、東京都は成蹊中学・高等学校、多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校、文京区立茗台中学校、江東区立小名木川小学校、神奈川県は座間市立立野台小学校です。これについても詳細は本会ホームページを参照してください。

総務部

総務部は次の 6 項目を柱に、全体的な連絡調整を行っています。

- 全国代表者会議、理事会、幹事会、会長候補者推薦委員会等の開催
- 東京学芸大学との連絡・調整の実施
- 既存の卒業生組織等との交流(総会・新年会等)
- 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務等
- 機関誌、予算書、決算書、事業計画等の発送
- 規則等の整備・見直し

(総務部長 手塚穰治)

会計部

会計部は予算の作成及び執行を中心に次の活動を行っています。

- 2019 年度予算の計画
- 予算の適正かつ効率的な執行
- 的確な会計事務の実施

(会計部長 佐藤節夫)

広報部

広報部は次の 3 つを中心活動しています。

- 機関誌『辟雍』第 16 号の発行
- ホームページの管理と充実
- 広報リーフレットの作成
ホームページは、辟雍会の動きを即時的に掲載しています。

(広報部長 小澤一郎)

組織部

昨年度に引き続き、会の組織拡大に努めました。

- ①支部設立事業は、本年度は 8 月 30 日に福井県支部が設立いたしました。さらに、宮城県、山形県、兵庫県、沖縄県支部設立に向けての準備が進められています。さらなる支部設立実現に向けて、組織部内の組織づくりを進めています。
- ②未加入の新入生に対し、6 月 27 日に 500 通の入会依頼文を郵送いたしました。新規に 55 名の会員が入会されました(9 月 10 日現在)。今後も学生、卒業生への加入を勧めてまいります。
- ③既存支部の総会や各支部の会合等に積極的に出席しています。近年では、青森県支部、鳥取県支部、大分県

支部、神奈川県支部、山梨県支部、静岡県支部等の会合に参加しました。これからも多くの支部総会への参加を予定しています。

- ④学科や専攻・選修等、サークル等の卒業生で組織されている既存の諸同窓会組織との連携を図るための事業を検討しています。会員の皆様の情報等をお知らせくださいますようお願いいたします。
- ⑤卒業・修了予定学生への配布物作成
昨年に引き続き、「卒業生・修了生のみなさんへ」(既存支部紹介)という案内パンフレットを配付するとともに、記念品(辟雍会の名称入りボールペン)を贈呈する予定です。

(組織部長 二宮修治)

事業部

- 1 学生のキャリア支援事業
学校教育系学生の近県学校訪問
東京都文京区立茗台中 9 月 30 日
東京都江東区立小名木川小 10 月 19 日
東京都(私立)成蹊中・高 9 月 19 日
東京都(私立)多摩大附属 9 月 25 日
千葉県(私立)千葉・国府台女子 9 月 27 日
神奈川県座間市立野台小 9 月 20 日
埼玉県富士見市立諏訪小 10 月 4 日
- 2 会員支援事業
法律ゼミの活動記録の出版
学生企画事業の支援
- 3 大学との共同主催事業
第 21 回ホームカミングデー 講演会
宇宙航空研究開発機構(JAXA)清水幸夫氏による「太陽系のなぞに迫る一小惑星探査機『はやぶさ 2』の挑戦」を開催予定、小金井祭開催期間中 11 月 3 日(日)
- 4 キャンパス環境充実支援事業
ご当地桜・県木の苗木の植樹
- 5 東京学芸大学辟雍会奨学金給付事業
(授与式 7/25、21 名給付)

(事業部長 荒川悦雄)



冬景色のけやき広場

あとがき

東京学芸大学キャンパスの四季は変化があって趣があります。メイン通りの木々に秋を感じる中、学生たちは小金井祭での活動に東奔西走しています。

『辟雍』第16号を皆様にお届けします。今号は、まず、馬渢会長が大学や教育界を取り巻く状況を総括的に示しています。各支部ではその活動をより質の高いものにしようとしています。そして、卒業生の活躍の場所は国内にとどまらず、かつ多岐にわたっていて刺激的です。また大学キャンパスの変容は、会員一人ひとりにとって興味深い内容です。これも前号に続いて貴重な資料を提供することができました。

なお、本誌だけでなくホームページもご覧ください。会員同士のきずなを強める一助になれば幸いです。

小澤一郎

発行人 馬渢貞利
編集人 小澤一郎
編集協力 中西 史
小柳知代
井上録郎
デザイン 門馬 純
印刷所 (有)サンプロセス

東京学芸大学辟雍会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
20周年記念飯島同窓会館2階
TEL/FAX 042-321-8820
E-Mail hekiyou@u-gakugei.ac.jp
ホームページ www.hekiyou.com



学士ネコ「前髪ちゃん」
飯島 和庭園にて



2019年 第16号

東京学芸大学辟雍会機関誌